

1 サービスのしあいが 社会を支える

前章では、お互いに社会生活を営んでいるのだという自覚をしっかりとつことの大切さについて述べました。

それでは、そうした社会人としての自覚をもちつつ、私たちは日々の生活の中でどのように行動していけばよいのでしょうか。私たちが社会人として実際に果たしていくべき役割、責任には、どのようなものがあるのでしょうか。

いろいろなことが考えられますが、やはりまずあげられるのは、他人に迷惑をかけるような自分勝手な言動は慎むということでしょう。社会生活の中で、お互いがそれぞれに勝手なことをして迷惑をかけあっていたのでは、世の中はギクシャクし、さまざまな混乱が生じてきます。ですから、他人に迷惑をかけない、自分勝手を慎むということが、社会人の責任の最も基本的なものです。

しかし、それだけで十分かといえば、決してそうではありません。お互いの社会生活を向上させていくためには、それに加えて、一人ひとりが社会に対して何らかのプラスになるように努めていくことがどうしても必要です。いい換えれば、お互いが他に対してサービスをしていくということです。

すでに述べたように、私たちは一人では生きていけません。お互いに力を寄せ合い、それぞれの働きを交換しあってはじめて、それぞれの生活を営み、人生を歩んでいくことができるわけです。これはつまり、他の人びとからのさまざまなサービスを受けているということです。

もちろん、自分で汗を流して働いて得た収入で生活し、活動しているのですから、他人のサービスというより、自分の力で生きているという考え方もできるでしょう。けれども、いくらお金をもっていても、相手が売ってくれなければ買えません。また、たとえば地下鉄がまだ通っていないところでは、いくら地下鉄の便利さを利用したくても、それはできない相談です。お金があっても、必要なものを手に入れられない場合はたくさんあるのです。

そういうことを考えてみると、お互いが必要なものを手に入れて、日々の

生活、活動といったものをスムーズに快適に営んでいくためには、やはり他の多くの人びとの働き、サービスというものが十分になければならないということがわかります。このことをお互いにまず正しく理解し、他の人びとから得られるサービスに対して、感謝の気持ちをもちあうことがきわめて大切でしょう。

松下幸之助 人生の知恵

④

感謝の心を



幸せを得ようと思えば、まず感謝の心が必要だと思えますね。人間とは妙なもので、同じことをしてもらっても喜ぶ人もあれば喜ばない人もある。いや、喜ばないどころか不平を感じる人もありますわな。たとえば、子どもでもね、お母さんが朝起こしてくれる、それを、ああ、お母さんが気をつけて起こしてくださったんだと喜びを感じる子どもと、うるさいなと思う子どもと、二通りあると思うんです。

どちらの子どもが幸せでしょうね。やはり、前者だと思います。お母さんの立場から考えても喜んでもらえましょうし、また子どものほうからいっても、“お母さん、ありがとう。私ももっと早く自分で起きなければならなかったのに……”というように、ことばに出さなくても感謝をする、そういう心がもてればその子どもは幸せですよ。また、そこに二人の心が通いあうのですな。

人間の幸せはみずからの心の中にあるとよくいいますね。ぼくもそれは一面の真理だと思います。

(松下幸之助「人生談義」PHP研究所)

2 10を受けたら11返すこと

それと同時に大切なのは、他から10のサービスを受けたならば、その受けたサービス以上のものを返すように心がけていくことです。

もし社会生活を営んでいるお互いそれぞれが、他からのサービスは受けるけれども、自分では何も返さないとか、10受けて9とか8しか返さないならどうなるでしょうか。みんながそういう姿であれば、社会全体としてのサービスの総量はだんだん少なくなります。それが一人ひとりが得られるサービスの低下に結びつくのは明らかです。

したがって、お互いがみずからの生活、人生の向上を望むならば、やはり自分が受けるサービス以上のサービスを他の人びとや社会に対して行っていかなければなりません。それは数量であらわすことのできない面も多いでしょうし、いちいちわかるわけにはいきません。しかし、少なくともそうした心がまえをもって日々を送っていくことが非常に大事なのです。私たちがみな、10のサービスを受けて11以上を返すようになれば、社会全体としてのサービスの総量も増えて、それが回り回って、お互いの生活の向上、社会の発展にもつながります。そしてまたそこから、私たち一人ひとりの幸せというものも高まっていきます。

それでは、社会全体のプラスになるようにサービスに努める、ということには、具体的にどのようなことが考えられるでしょう。

まず何とんでもその中心となるのは、お互いのそれぞれの仕事、つまり自分の本業を通じて、社会生活の向上に寄与、貢献していくということです。

ここでいう本業とは、企業、商店の仕事など、いわゆる狭い意味での職業ということだけではありません。主婦の人たちの家事や育児、学生の勉強などといった広い意味での仕事も含まれます。そうしたおのおの本業において、一人ひとりが着実な成果をおさめていくということが、他へのサービスという社会人としての責任を果たすうえで、誰にでもできる道といえるのです。

私たちの社会生活を向上発展させていくためには、いろいろな分野の活動が

それぞれ十分に行われ、よい成果が生み出されていかなければなりません。すなわち、政治は政治として好ましい姿をあらわし、経済は経済としてスムーズに運営され、教育は教育として真に望ましい姿で進められていく。そういうところから、お互いの社会生活の向上も実現されていくことになるわけです。

そして、そのような各分野の活動が、実際にはどのような形で行われているかといえば、官公庁や民間の企業、商店、あるいは学校や団体その他もろもろの機構、機関がその主体となっています。そこでは一人ひとりが、それぞれの担当業務をみずからの職業、仕事として進めているわけです。

これはいうまでもなく、お互い一人ひとりの日々の仕事というものが、社会生活の向上と密接なつながりをもっているということです。したがって、“社会生活の向上にプラスになるように”ということは、とりもなおさず、私たち一人ひとりが自分の本業に一所懸命に取り組み、そこによりよい成果をあげていくことにほかなりません。お互い社会人であるからには、まずそういった自分の仕事の意義というものを正しく認識し、その意義をまっとうすることができるよう、十分に努力をしていく必要があります。それが社会人としての最も大切で、かつ基本の責任といってよいのではないのでしょうか。

